町長ひとりごと ㉑

斉藤 譲

仄かな道

人の楽しみや喜びは、苦しみや悲しみの存在の中から生まれ、ものの白さは、黒の存在によって強調される。これと同じように、秋風は、真夏の太陽に焼かれた大地や、暑さに疲れ傷ついた人の心や肌を吹きわたるからこそいっそう爽やかであり、清冽なのである。ところが、今年のように、梅雨期から秋にかけて長い間天候不順が続き、夏の季節が抜け落ちたような状況では、秋の爽やかさどころか、稔りの秋という感動さえあまり湧いてこない。寸分違わぬ四季の廻りこそが、いかに私達の生活や心に安定とやすらぎを与えてくれるかを知り、今更ながら大自然の恵みと脅威、そして人間もその中で生かされているのだということを、つくづくと思い知らされたような気がする。

とに角、今年はこのような天候状態であったから、夏の海水浴も不振であり、また町の基幹作物である水稲の作況も思わしくなく、おまけに収穫作業は、軟弱な地盤にたたられて困難を極めた。皆さんのご苦労が偲ばれるところである。ただ、このような悪条件の中で、ライスセンターだけは、どこも比較的順調な稼動をしており、協同の力の大きさを見せつけられた。

光町は近隣市町と比べて、ライスセンターの数も多く、二十二年の実績をもつ西高野農機具利用組合を先駆けとして七施設ある。それぞれの施設とも、歴史の違いがあるように、施設や運営にもかなりの違いがあり、またそれなりの問題も抱えてはいるものの、組合員の結束によってこれを克服しているのである。

いま、水田農業は、厳しい輸入を求める外圧や消費者の内圧を受けて、連年の米価引下げと減反の嵐に曝されている。このような状況の中で、水田農業を確立することは決して容易なことではないが、この成否をにぎる鍵は、受委託による規模拡大とコストの軽減をおいて外にはない。これを可能にするためには、ライスセンターや農協等の法人による、しっかりとした組織や協同による受皿が何よりも必要である。個人では、現在の土地条件や労働力などの面から考えると限界があるように思われる。従って、この受皿づくりと、その強化を図ることが、これからの町の農業政策の中心的な課題となるであろうし、また農協の役割もそこに視点を向けていかなければならないのではないかと思う。

ところで、七ヵ所のライスセンターの中には、今年産声をあげたばかりの入ライスセンターが入っている。昨年入集落の若い後継者十人が集まって営農組合を組織し、先進地を視察したり、検討を重ねたりして準備を進め、見事八月中に施設を完成した。組合員十名の水田面積は十五ヘクタール、受託を見込んで、三十ヘクタールの処理能力をもつ近代的な乾燥調整施設と最新型高速五条刈りコンバイン二台を導入した。これに要した総事業費は約六千万円で、国県、町の補助金を除いた地元負担金は約二千万円であるから、組合員一人当たり負担額は約二百万円、個人で施設した場合と比べれば格段に小額である。九月の半ばに稼動状況を視察し、生まれてはじめてコンバインに乗せていただいた。十アールの刈取時間が十五分というだけあって、とに角速いのである。お揃いの前掛けをかけて生きいきと働いていた一人の奥さんが「重い籾袋を持つ必要もなく、夕方五時か六時には帰宅できて、家は汚れないし、夜中の乾燥機の心配もなくなって本当によかった」とうれしそうに語る笑顔がとても印象的であった。センターに行ってみると、そこはまさに近代工場といった感じで、乾燥調整は、すべて事務室のコンピューターで操作され、必要があれば、いつでも画面で状況確認ができるのである。「こんなことなら、もっと早くやるべきだった」と農業委員の林英男氏が私に話しかけてきた。来年は、組合員の水田を、総てセンター管理にする計画だという。

事務室には、きれいな花が飾られていた。驚きである。農業の働く現場に花を飾るなどという意識や感覚などは、持ったことも考えたこともなかった。私にはこの花が、重労働から解放された農村婦人の喜びを、静かに語っているように思われた。